



Title	ワーズワスにおける都市：アンチテーゼとしてのロンドン
Author(s)	齊藤， 隆文
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 4, p. 199-211
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79519
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワーズワスにおける都市

—— アンチテーゼとしてのロンドン ——

斉 藤 隆 文

Wordsworth's London

—— The Antithesis to Nature ——

Takafumi SAITO

The aim of this paper is to show how London, as an antithesis to nature, played a crucial role in making Wordsworth acknowledge the value of his communion with nature as a child. Wordsworth was undoubtedly a nature poet since he devoted his life to writing poems on nature and its meanings to man. It does not follow, however, that he was not concerned with a city and the life there. His description of London, for instance, reveals the fact that his view of nature was formed and consolidated through his experiences in the city. He frequently explains how often 'amid the din of towns and cities in hours of weariness,' he turned to nature and to what it represented. It was with this acute sense of contrast between nature and London in mind that he started *The Prelude* with the symbolical depiction of his pleasure of returning to the Lake District from the great capital. Wordsworth thought that nature set the absolute moral standard man could always abide by, whereas London at that time was in a state of 'blank confusion' where people had no choice but to live without a meaning or an end. Living in the age of the industrial revolution and its inevitable strain, Wordsworth, we might say, was the first English poet who, in view of both nature and the great city, pointed out the darker side of urbanization and asserted the superiority nature had over London.

自然詩人として多くの作品を残したワーズワスに関しては、その研究は当然のことながら、詩人の自然観やそれを中心にした世界観や人生観におおきな重点が置かれている。しかしながらあえてここでワーズワスの都市について論じようとするのは、一つにはワーズワスも都市について触れた詩を書かなかったわけではないことと、もう一つはその都市観を確認することによって、ワーズワス本来の自然観、世界観に反対側から光をあて、従来とはちがう観点からそれらを眺めることができると思われるためである。なるほどワーズワスがいくら幼年時代からその晩年に至るまで英国の湖水地方にその居住を定めてきたとはいえ、ケンブリッジ大学への進学やそれに続く数回のロンドン滞在など詩人の精神におおきな影響を及ぼした機会は少なくなかったし、またそうした機会があったために、すなわちワーズワスが一人の農民のようにその一生を湖水地方で過ごすことがなかったために、かえって詩人のなかに自然にたいする強い愛着がめばえ、その感情が客観的な形で詩となったといえるからである。

自然に対するアンチテーゼとしての都市という構図、あるいは田舎対都会という対立は古来から続いて来ているが、都市が特に18世紀以来大きな問題となるのは、産業革命によるその急速な拡大とその影響力の増大であり、人口比率の田園と都市との逆転による社会構造の変化の為である。イギリスの都市の中でロンドン単なる工業都市である他の都市と違って、その大きさだけでなく多種多様な側面を合わせ持つ都市としての機能を果たしているため、ここで都市という場合ロンドンを考えることにするが、そのロンドンの人口は例えば1660年には50万人であった。それが1700年と1820年の間に125万人になっている。⁽¹⁾ ロンドンは周知のとおりポープ、ジョンソンなどの新古典派を育んだ当時の文明の中心であると同時に、ホガースやデフォーの描くように暗い現実の都市問題を抱えてもいた。そしてその規模の拡大と共にひずみも増大していったのであり、たとえばブレイクの目に映ったロンドンは都市の弱点と暗黒面を浮き彫りにしている。⁽²⁾

しかしながら、当時のロンドンを肯定的に見ていたにしろ否定面を中心にとらえていたにしろ、こうした人々はたいてい都市のなかでうまれ育ちそこで生活をしながら都市について語っている⁽³⁾のであって、その見方はのちのワーズワスなどとは当然違っている。新古典派の自然は文学的な伝統に沿ったパストラルの流れをくむ観念的な自然であり、ホガースやデフォーなども現実の自然に対する都市という構図でロンドンを批判しているのではない。ピクチャレスクへの興味が次第に醸成されつつあったとはいえ、現実の自然は18世紀にロンドンに活躍した文人達の視野には入っていなかったのである。その意味では現実の自然との体験を踏まえていたワーズワスのロンドンに対する見方ははっきりと都市対自然の構図の中にとらえられており、ロンドン人たちのロンドン批判とは違って、皮肉や自嘲あるいは自惚れをこめた言葉ではなく、より包括的でより根本的な見解を示しているように思われる。もちろんその見解は予想されるように基本的にはロンドンに対する批判となって現れるのではあるが、⁽⁴⁾ われわれに興味をいだかせるのはむしろ自然との対比の中で、何をもって都市に対する自然の優位性をワーズワスが主張したかで

ある。

『序曲』には詩人のロンドンに対するかかわりあいが少ないから描かれていて、その跡をたどって行くとワーズワスの都市に対する見方がかなり鮮明に把握できるように思われる。注目すべきことは通念に反してワーズワス自身ロンドンに対して持っていたあこがれの感情を正直に告白していることである。すなわち子供心にロンドンに対する数々の空想を抱き、そのすばらしさほどのような宮殿の話も書物が物語る都の話も及ばないくらいのものであったという。⁽⁵⁾ それゆえ詩人の友人がロンドンに呼び出されたとき、ひどくうらやましく思えたこともつけ加えている。実際少年期のワーズワスはその当時の田舎に住む少年がたいてい共有していた都市観を持っていた。もちろんワーズワスが心に描いていたこのような他愛のない都市観が現実の都市に出会って変化していくことは、先のロンドンから帰った少年が当然示すはずのなにか輝かしいきらめきを見せないことに失望した事実すでに暗示されている。

このように都市に対する憧憬の気持ちは少年ワーズワスの心に大きな位置を占めていたのに反して、自然は享楽の対象ではあっても、後の意味での思考の対象ではなかった。自然がワーズワスに及ぼしてくれた影響に気付くのは結局詩人が自然と離れたあとのことであり、自然の中で子供の遊びにふけている幸福な間にはただ日々が過ぎていったのだと言えるだろう。ワーズワスがあれほど称えた自然は結局後になって回想のうちに意味を与えられたのだといえる。ワーズワスのいわば口癖は「私には（今）どうしても思えないのです。あなた（自然）がいいかげんな気持ちからであったとは」(V.492-3)という過去表現であった。そしてワーズワスに自然との交感の意義について目覚めさせたのは結局非自然的なもの、つきつめて言えば都会的なものとの接触であったことは容易に想像できる。その接触は主に二つの段階を経ている。一つはケンブリッジ大学への進学であった。

1787年17才のときワーズワスはケンブリッジ大学のセントジョンズコレジに入学し、初めて故郷の湖水地方を離れることになった。その時の詩人の高揚した気持ちは「私の心は躍り、希望は胸をふくらませた」(III.16)という言葉で表現されている。

‘I was the dreamer, they the dream.’ (III.28)という表現もまた新しい生活に対して有頂天になっていた青年ワーズワスの正直な心情をよく示している。実際当時ケンブリッジに進学することは大きな名誉であったに違いなく、その栄光は最初詩人を幻惑させた。しかしワーズワス本来の性格が徐々に顔を出し、そこにおける学問が当初考えていたのとは違っていることに気が付き始める。すなわちその時まで自然に対して払っていた敬意をこんどは学問に向けさせるような(III.380-387)そういう権威をもつものとして期待していたにもかかわらず、大学はその期待を裏切るものであった。ルソー的な教育観をいだいていた⁽⁶⁾ワーズワスにとって、当時の新教育法の重点とするスコラ的な学問、人間を秤にかけるような試験、そして学生の虚栄心などは何の価値もないものに思えた。そして「常にその時その場所に自分が属していないという感情」(III.80-81)にかられたのである。こうした感情は後にロンドン滞在の際にも経験するものであっ

たが、これをきっかけとしてワーズワスは本来の自分を取り戻すことになる。そのときこう言っている。

And now it was, that, from such change entire,
And this first absence from those shapes sublime
Wherewith I had been conversant, my mind
Seemed busier in itself than heretofore;
At least, I more directly recognized
My powers and habits. (III.101-106)

こうして「崇高な事物」である自然と離れ当時のいわゆる理性の時代の学究を代表する大学生活に触れて初めて、自然との交感において養われた能力の価値を認知するようになるのである。ケンブリッジはその頃1万人程度の人口をもつ田舎町⁽⁷⁾であり、都会ではなかったけれども、ワーズワスも言っているように、それは大きな世界の縮図であって(III.616-7)、その「本来まったくまともなどあろうはずもないものから成り立っているこの派手な集散物の中にいると頭はくるくるまわり、ただしく向けず、そして軽薄な錯乱のうずくような不毛な感じはいまや絶頂に達す」(III.661-665)の様は将来やはりロンドンでも経験するようなものであった。そして10カ月が過ぎ、故郷へ帰ることになるが、その時の描写はワーズワスがもはやかつてのように自然と無垢の交感ができなくなりつつあることを微妙に物語っている。それは「今までとは違った目」(VI.200,205)という表現が象徴しているが、結局突き詰めて言えば、「違った目」とは自然との無垢な交感において作用した目ではなく、世間をある程度知り、そのなかにおいてある種の墜落、ワーズワスの言葉によると「内面の墜落」(VI.270)を経た後に初めて味わえる、自然との意味づけられた交感において作用する目を持つに至ったことであろう。内面の墜落とは具体的には、世間における様々な娯楽に誘惑され自然に対する情熱を一時的に失った事を指しているが、このことによってワーズワスはかつての自然との無垢なる交感の状態に戻ることはなくなってしまったといえよう。楽園喪失と同様に一度失った楽園へは戻ることは不可能であり、ワーズワスは回想によってかつての幸福な状態を再現するしかなかった。そしてそのきっかけとなった都市的なものとの接触ゆえに、ワーズワスにおける都市はロンドンでの経験ともあいまって、自然に対するアンチテーゼとしてはっきりと自覚されたのであるといえよう。ワーズワスが詩人として立つことを自分に誓ったきっかけが、血管をうずかせるような陽気な社交の場であるダンスパーティからの帰り道で、ひとりで壮麗な自然を前にした時であった(VI.329-345)のは都市的なものと自然という対立を際立たせていて興味深い。

このようにケンブリッジにおいてすでに都市とはいわないまでも都市的な経験の一端に触れた後ワーズワスはそこを去り1791年にロンドンを訪れる。このロンドンへの旅に関しても先に述べたように多くの期待を持っていたのである。この場合の期待はケンブリッジの場合とは違ってもっと卑近なものに対してであり、詩人がセントポール寺院、ウエストミンスター墓地、ロンドン塔

などを見ることをいかに楽しみにしていたかを『序曲』のなかで詳しく書いている。ただ同時に「とりわけどうしても分からなかったのは、すぐ隣の人達と互いの名前も知らないで人々がどうしてお互いやって行けるのか」(Ⅶ.118-120)というような素朴だが、本質的にワーズワスが都会人とはなり得ないことを暗示するような疑問を感じてもいた。事実現実の情景を眺めて「最大の失望を感じた」(Ⅶ.142)のではあったがそれでもその記憶を「白昼の夢」(Ⅶ.153)として描いている。そこに見られるロンドンあらゆる風俗を集めた見世物として描かれているが、ワーズワスがなぜそれに失望したのかを探るために、そこに現れる典型的な事物や人物達を取り上げてみたいと思う。その際詩人がたたえた自然とそこに生きる人々を対比させればより一層その価値観に迫れるのではないかと思う。

そのロンドンの市内についていえば、ワーズワスはとめどなく変化して行く流動的なものとして描いている。

Here, there, and everywhere, a weary throng,
That Comers and Goers face to face,
Face after face; the string of dazzling Wares,
Shop after shop, with Symbols, blazoned Names,
And all the Tradesman's honours overheard;
Here, fronts of houses, like a title-page
With letters huge inscribed from top to toe;... (Ⅶ.171-177)

そこに見られるものの特徴は乱雑な無秩序である。それぞれの人間はそれぞれの顔を見せるが、また様々な商品には名札がつき、家々には何やら文字が書かれてはいるがそれらはただ互いに個を主張しあっているだけでそこに何の秩序も見いだせない。これと1790年のアルプス地方を旅行した際の情景を比べてみると詩人の意図が理解できよう。

Tumult and peace, the darkness and the light,
Were all like workings of one mind, the features
Of the same face, blossoms upon one tree,
Characters of the great Apocalypse,
The types and symbols of Eternity,
Of first and last, and midst, and without end. (Ⅵ.567-572)

ここにもやはりカタログ的に情景の描写がなされている。がしかし最もロンドンの場合とちがうのはワーズワスがそこに統一性を見いだしていることであり、個々の様々な表情は一つの永遠性をもつ精神を指し示していると感じていることである。なぜワーズワスはロンドンの市内の情景に統一性を認めず、アルプスの風景にそれを認めるのであろうか。一つにはバジル ウイリーの言うように「人間の手によらぬものに取り囲まれてただ一人いれば、ある深い渴望がどっしりと満たされる。」⁽⁸⁾ことが原因しているからでもあろうがしかしそれよりも、引用の最後にあるよ

うに最初からあり、今もあり、将来にわたって永続していくものに対する根本的な信頼がはっきりと読み取れることである。逆にワーズワスはロンドンの情景を描くに当たって、「白昼夢」であるといい、また‘exhibition’ (VII.281)であるとも言っている。確かに白昼夢ならいつかは覚めるし、展覧会ならば始めもまた終わりもあるのである。事実ワーズワスの『序曲』におけるロンドンの描写は雑踏の喧噪をそのまま引き写したように、生まれては消えてゆく雑多なイメージに満ちている。ワーズワスはしかしながらそのようなロンドンを楽しまなかったとはいっていない。⁽⁹⁾たとえば当時の様々な劇場の演劇を理屈抜きで楽しんだと書いている。ただその後でこう付け加えている。「たしかに悲劇的な苦悶に感激し胸が一杯になっているときでも、想像力は眠っていた。というのは私はひどく感激し、すなおな気持ちで場面の変化に没頭したのだけれど、こうした感情は精神のうわつつらを撫でるに過ぎなかったから」(VII.500-507)。ロンドンの情景がこのようであるとすれば、そこに生活する人々についてはどのように書かれているであろうか。

He [the Orator] winds away his never-ending horn :
Words follow words, sense seems to follow sense;
What memory and what logic! till the strain
Transcendent, superhuman as it is,
Grows tedious even in a young Man's ear. (VII.538-542)

ここではワーズワスはロンドンのいわゆる名士たちの描写をしている。聴取者が舌をまくほどの名演説についてのものだが、ここでの雄弁家（当時の総理大臣であったピットを暗に指していると言われているが）⁽¹⁰⁾についての描写はかなり皮肉が混ざっている。十数行にもわたってこの雄弁家を称えた後最後の3行でぼつりと不満を漏らしている。大袈裟に書かれた称賛はおそらくロンドン人たちの大方の評価であり、後の3行はワーズワスの本音であろう。‘transcendent’ ‘superhuman’ という語も後のアンチクライマックスと対照させられて本来の意味に皮肉な調子が加わっているのが感じられる。ところで詩人が批判しているのは、この演説の流れるような言葉の見事な羅列に比してのその中身の貧弱なことであろうか。演説の内容については‘what logic’と言っていることから分かるようにおそらく人々の胸を打つように計算され尽くしたものに相違なかった。実際具体的な内容についての批判は何ひとつ書かれていない。そうすると何が詩人の胸を打たなかったのであろうか。「決意と独立」のなかに現れる蛭とりの老人の場合と比較して考えてみたい。「このようなさみしい場所で何をしておいでですか」(II.88-89)というワーズワスの問いに対して、蛭とりの老人は次のように答えている。

His words came feebly, from a feeble chest,
But each in solemn order followed each,
With something of a lofty utterance drest —
Choice word and measured phrase, above the reach
Of ordinary men; a stately speech;

Such as grave Livers do in Scotland use,
 Religious men, who give to God and man their dues.
 'Resolution and Independence,' 92-98.

ロンドンの雄弁家とは対照的に蛭とりの老人は雄弁家のような堂々たる口調で話し出すことはない。しかしながらその話しかたたるや凡人の域を越えたものであった。実際ここでワーズワスは老人に対する印象をロンドンの雄弁家に劣らない調子で賛美している。「言葉が荘重な調子で続いた」「的確な言葉と整った言葉使い」という表現は双方に共通するようなものであろう。ワーズワスは表面上の話しぶりに関しては両者の間に大きな優劣を認めていないのである。それではワーズワスがこの老人から強い啓示のごとき印象を受けているのは老人の語る言葉の中身の為であろうか。それについて言えば当然高い教育のあるはずもない老人の話す内容は教養に満ちているはずもなく、むしろほとんど実質的には何も語っていないと考えても良い。というのは老人は、「貧しくて老いたので、大変骨のいる仕事だが蛭を集めながら、池から池へと回っている」(99-103)と語ったに過ぎないからである。これはほとんど自明のことであり、特に状況から判断できること以上の事実には触れていない。しかも聞いているうちにその老人の言葉は「かすかにしか聞こえない流れのようになり、言葉も判然としなかった」のである。(107-108) これは一つには勿論ワーズワスが半ば夢想の状態に陥ってしまったからでもあるが、結局は詩人が啓示を受けたのは、老人の話の内容からではない事をも示している。雄弁家と老人を峻別するのはその内容でも、またその語り口でもないとするれば一体何であろうか。

雄弁家についての描写と老人についての描写とをもう少し比較してみたい。最も明らかな相違は「何という記憶力」と称賛を受けた雄弁家にたいして老人はその言葉を前もって準備していたのではないということである。すなわちその相違は基本的にはロマン主義のテーゼである 'unpremeditated art' ⁽¹¹⁾、'naturally as the leaves to a tree' ⁽¹²⁾、'spontaneous overflow of feelings' ⁽¹³⁾と表現されているような言葉の自然なままの発露という点に帰着されると考えられる。ロックに代表される18世紀的な思想、すなわち精神の能動的な役割を認めず、記憶とそれを蘇らせることを精神の重要な働きとみなしていた考え方⁽¹⁴⁾に対して批判的であったワーズワスは、この雄弁家に対しても同様の不信を交えながら、「なんという記憶力」といったに違いない。しかしながら言葉の自然なままの発露がなぜ重要であるのか。ハーバード リードはその著書 *The True Voice of Feeling* において自然なままの感情の発露は結局「誠実さ」ということに結び付くという点を強調しているが⁽¹⁵⁾、おそらくワーズワスも同様の観点に立って、この雄弁家のなかに人の称賛をあさる(VII.572)いやしい動機を見ぬいたのであろう。

しかしながら誠実さという点からは説明できないもう一つの相違点は牧師でもない老人の言葉が宗教的な荘重な調子を帯びていたことである。同じようなことが「西方へいく」という詩の中で描かれている。すなわちそこで登場する一人の田舎に住む女性の「西方へ歩まれるのですか」という一言によってワーズワスの旅は象徴的な巡礼の旅ともいえるものになってしまうのであ

る。‘heavenly destiny’ (12) や ‘spiritual’ (15) という言葉によって、詩人が歩むこのスコットランドの風景は平凡な風景から一変している。それはちょうど「決意と独立」のなかで老人の言葉を聞いているうちにその老人がつぎのように思われてきたことと軌を一にしている。

And the whole body of the Man did seem
Like one whom I had met with in a dream;
Or like a man from some far region sent,
To give me human strength, by apt admonishment.
‘Resolution and Independence,’ 109-112.

「西方へ歩む」における女性も上の老人の場合と同様に、その内容によってあるいはその話しぶりによって、ワーズワスにそうした宗教的ともいえる印象を与えたのではない。何がそうした情況をもたらしたのか。それを知るために「決意と独立」の中で詩人が次のようにいっている箇所があるのに注目したい。

While he was talking thus, the lonely place,
The old Man’s shape, and speech — all troubled me:
‘Resolution and Independence,’ 127-128.

「私を悩ませた」というのは、詩人の心に強いそして消しがたい印象を与えたということであるが、ここで問題としたいのは、ワーズワスの場所へのこだわりである。老人が話をしているのであるから、当然注意は老人にそしてその話に向けられて当然なのに、詩人の注意はむしろ老人のいる場所とその状況にむけられているからである。老人の姿については、第10、11スタンザを中心に説明されているが、一言で言うと、老人がいかに周囲の自然に同化し、その自然の一部と見えるかであり、詩人の視点が老人を中心とした自然に向けられていることはまちがいない。

場所についてのワーズワスのこだわりかたは、並々ならぬものがあり、作品の諸所に場所に人間がいかに規定されるかを書いている。たとえば詩人の母親については「母が偉大であったのは、他の人にまさる能力があったためではなく、母の生きていたあの時代とあの場所柄の為であった」(V.287)といっているし、ロンドンで見かけていらい詩人の心から離れなかったという幼い子供についてはこんな事を言っている。すなわち「農家の傍らでも、別の所でも、大自然のたまものにこんなに恵まれた赤ん坊を見たことがなかった」(VII.381-383)というほどかわいらしい赤ん坊をある場末の劇場で見かけたことがあった。しかしこの赤ん坊も周囲の放埒な人々のなかにいれば、成長したときにおそらく同じようになってしまおうと言うのである。ワーズワスにはこのように環境が人間の人格を左右するという考えが根強くあり、実際つぎのようなことも言っている。

Nor was it mean delight
To watch crude nature work in untaught minds,
To note the laws and progress of belief. (VII.297-299)

その場合上の赤ん坊の場合にあるように、ワーズワスが環境を語るときそれは田舎とロンドンとの対比のなかでとらえている。とすればロンドンの雄弁家と蛭とりの老人や「西方に行く」における婦人との決定的な差異は結局彼らのいる場所に規定されるように思えて来る。つまりワーズワスのロンドン人に対する考え方は結局ロンドンという都市そのものに対する考え方に立ち返ることになるのである。実際『序曲』の「ロンドン滞在」においてロンドンに対する記述とロンドンにおける典型的な人々に対する記述が軌を一にしていることに気付かないではおれない。ワーズワスはそのことを実に適確にこうまとめている。

Oh, blank confusion! and a type not false
Of what the mighty City is itself
To all, except a Straggler here and there,
To the whole Swarm of its inhabitants;
An undistinguishable world to men,
The slaves unrespited of low pursuits,
Living amid the same perpetual flow
Of trivial objects, melted and reduced
To one identity by differences
That have no law, no meaning, and no end. (VII.695-704)

‘The types and symbols of Eternity, of first and last, and midst, and without end’ というアルプスの記述における永遠性の象徴としての多種多様とは全く対立する無意味な多種多様がロンドンの特徴としてあげられている。その多種多様さは個々を調和のうちに際立たせるのではなく、逆にその無目的ぶりによって個性を埋没させてしまうと言うのである。そしてロンドン人たちの混乱きわまる所業は、ロンドンそのものの象徴であると言う。さらに「どのように高潔な精神でも、どんな強烈な個性でもそこから自由にはなれない重圧となる」と付け加えている。とすればワーズワスがロンドンの雄弁家にたいして抱いた不審の根本には、彼もロンドンの毒牙にかかった一人だと思なしたことがあるのではなからうか。逆に蛭とりの老人に詩人があれほどの意味をあたえたのは、老人がその生涯を過ごして来たその場所のもつ力を感じとっていたからに外ならない。「決意と独立」の結びの言葉は、たんに蛭とりの老人にたいしてではなく、特定の場所にいる老人に対して向けられているのはその証左であろう。

‘God,’ said I, ‘be my help and stay secure;
I’ll think of the Leech-gatherer *on the lonely moor!*’
‘Resolution and Independence,’ 139-140. (イタリックスは筆者)

都市における無意味な多様性と自然における永遠の象徴としての多様性とは以上のようにワー

ズワスにおける都市観と自然観を考えるうえでの基本となるのであるが、⁽¹⁶⁾ それでは永遠性の象徴を顕示する自然は実際にどのように人間の精神に影響を及ぼすというのであろうか。特に蛭とりの老人や「西方に歩む」の夫人に帰属させられるような宗教的とも言えるほどの尊厳はどのようにして生まれるというのであろうか。

ワーズワスはロンドンの混乱のなかにも「部分は部分として見ながらも、全体に対する感覚を失わない人」(Ⅶ.712-713)はそれに影響されることはないと言った後、そういう能力は教育によって養われるのだという。とはいえその教育とは学校教育のことではない。

Attention comes,
And comprehensiveness and memory,
From early converse with the works of God
Among all regions; chiefly where appear
Most obviously simplicity and power.
By influence habitual to the mind
The mountain's outline and its steady form
Gives a pure grandeur, and its presence shapes
The measure and the prospect of the soul
To majesty. (Ⅶ.716-725)

ここで山の輪郭が魂の尺度と内的風景を形作るといっていることに注意したい。汎神論的な観点ともいえようが、神の秩序の反映としての山々の姿に幼いときから触れることによって注意力、理解力、記憶力が生まれ人間の精神が形づくられる。そして絶対的基準を持つものと、自らと自らの創造物を比較することによって、人間は正しい尺度で物事を判断できるようになり、無秩序と混乱の中に埋没せずにいられるというのである。すなわち先程も言っているように、部分の中に埋没するのではなく、絶えず全体に対する感覚を失わないこと、いかえれば自然のなかで養成される絶対的な価値判断を失わないことによって、人間は「何が、どこから、いつ、どんなふうに」(Ⅶ.600)という都会人を蹂躪している疑問から解放されるのである。そう考えると「何をしておいでです」という問いに対して蛭とりの老人が確信に満ちて答えたとき、その老人のそうした態度のなかに自然のもつ絶対的尺度に支えられた力強い意志をワーズワスは感じたのだと言えよう。

それに反して詩人がロンドンで見かけた盲目の乞食は、胸に自分の名前と経歴を記した紙をぶら下げていたが、その様子は蛭とりの老人とは逆に、人間の弱さと限界をワーズワスに直感させたのであった。その乞食はロンドンという絶対的尺度のない混乱のなかで自己を失ったものの象徴であり、いまやその名前と経歴さえも、自分の目でさえ確認できない実体のない紙切れのうえに書かれているにすぎないからである。また「西方へ歩む」の婦人の言葉がなぜ詩人にその旅を一変させるほどの力をもっていたかも同様に理解できる。すなわちその言葉が詩人の胸を打つには心の落ち着きと人間の魂を気高くしてくれる調和(Ⅶ.745)を与えてくれるその場所が背景となっ

ていなければならなかった。それゆえワーズワスはその詩の前書きでもまた詩の中でも注意深くその婦人のいる背景を記述する。

...and she who spoke
Was walking *by her native lake*.
'Stepping Westward,' 17-18. (イタリックスは筆者)

このようにワーズワスにとって絶対的な尺度を人間に与えるものとしての大自然は、いわば神の不変の法則にも似たより所を与えてくれるものであって、人間がそれを意識しているいないにかかわらず、背景にその存在がある事によって人間は知らず知らずその感化を受けるとというのがワーズワスの信念であった。その意味で四方を人工物にかこまれているロンドン人たちは自分を正しく把握するための絶対的な尺度を失っており、すべてが相対的で「突飛で不自然な、歪んだもの」(VII.688)となる可能性を秘めていた。空間的な眺望と共に時間的な眺望を好んだワーズワスは、その眺望のなかで北極星がそうであるような絶対的な信頼をおける道標として山河を選んだのであり、ティンタン寺近くのワイ川やヤロー川を再訪しその詩を書いたのも、いわばこうした道標の確認の為であった。

ワーズワスにおいてロンドンはその意味でこうした精神的道標としての大自然との出会いを妨げる「牢獄」(I.8)としてとらえられている。しかしながらそのロンドンでさえ、大自然の絶対的な尺度の中に取り込まれるとき、例外的にその尊厳を取り戻すことは可能であった。1802年に書かれた 'Composed upon Westminster Bridge' はイギリスロマン主義が自然をその称賛の中心においていた中で、まれなるロンドン賛歌である。

Earth has not anything to show more fair:
Dull would he be of soul who could pass by
A sight so touching in its majesty;
This City now doth, like a garment, wear
The beauty of the morning.
'Composed upon Westminster Bridge,' 1-5.

ここにおけるロンドンの美はしかしながら、あくまでもこの町が大自然を背景にして、その絶対的な存在に触れたときに可能であった。すなわちその町は「野や空に向かって開かれて」(I.7)いなくてはならなかった。それはちょうどコンスタブルがロンドン市内の風景を描くことはほとんどなく、実際に描かれたロンドンが自然の風景の中に遠景として置かれているのと呼応している。そして谷や川や丘と比較してロンドンを見るワーズワスの眼差しは明らかに大自然の絶対的基準に照らしてのものである。

Never did sun more beautifully steep
In his first splendor, valley, rock, or hill.
'Composed upon Westminster Bridge,' 9-10.

以上見てきたようにロンドンにはワーズワスと自然とのかかわりのなかで独自の役割を果たして来たと言える。すなわち詩人の自然に対する認識は故郷の湖水地方を離れ、ケンブリッジからロンドンへと都市的なものを経験するにつれ次第に深まっていったのである。それにつれて自然はその美によってだけではなく、人間に与えるその倫理的な意味においてワーズワスをとらえるようになっていった。それは明らかにロンドンの生活を通じて得た経験を通してのみ可能であった。自然のなかで過ごした幼いころの幸福な日々と、後になってその自然の中に「精神的存在の魂」を認めた時代の間には大きな自然観の断絶が見られるが、それはとりもなおさずロンドンを中心とした都市が詩人の中で明確にアンチテーゼの役割を担い、ワーズワスに自然観の再構築をせまったことを示している。そして『序曲』がその再構築された自然観の記述でもあることは、詩人がこの叙事詩をロンドンから故郷に帰った直後の描写で始めていることから明らかであるといえよう。またこの詩がワーズワスの汎神論を理解しなかったといわれる⁽¹⁷⁾ コールリッジに献じられていることは、元来都会人であったコールリッジに対して自然の優位性を説くことをワーズワスはひそかに狙っていたとも考えられるのではないだろうか。⁽¹⁸⁾ 事実ワーズワスは『序曲』の中でこの叙事詩について次のようなコールリッジに対する個人的な発言を記しているのである。

Of Rivers, Fields,
And Groves, I speak to Thee, my Friend; to Thee. (VI.274-5)

注

ここに引用したワーズワスの作品は断りのない限り1805年版の *The Prelude* E.D. Selincourt編 (Oxford University Press) からのものである。

- 1) Raymond Williams, *The Country and the City* (London: The Hogarth Press, 1985), p.146.
- 2) William Blake, 'London'.
- 3) ポープ、ブレイク、ホガース、デフォーともロンドン又は近郊で生まれその生涯の大部分をロンドン又はその周辺で過ごしている。
- 4) Paul Hamilton, *Wordsworth* (Sussex: The Harvester Press, 1986), p.113.
- 5) *The Prelude*, Bk. VII. 121-135.
- 6) John Purkis, *A Preface to Wordsworth* (London: Longman Group Ltd., 1967), p.73.
- 7) *Encyclopaedia Americana*, 'Cambridge'.
- 8) バジルウィリー、『イギリス精神の源流』樋口、佐藤訳 創元社。p.93.
- 9) ロンドンはワーズワスにとって一時的にしろ大きな魅力であった。 Cf. Melvin Rader, *Wordsworth* (Oxford: Oxford U.P., 1967), p.106.
- 10) *William Wordsworth, The Prelude, 1799, 1805, 1850* Ed. Jonathan Wordsworth (New York: W. W. Norton & Company, 1979), p.252.
- 11) Percy Bysshe Shelley, 'To a Skylark,' 5.
- 12) *The Letters of John Keats*, Ed. M.B. Forman (Oxford: Oxford U.P., 1931), I, 116-7.
- 13) *The Poetical Works of William Wordsworth* Ed. E.D. Selincourt (Oxford: Oxford U.P.), vol. II, p.400.

- 14) 前掲書『イギリス精神の源流』, p.232.
- 15) Herbert Read, *The True Voice of Feeling* (London: Faber and Faber, mcmxlvii), p.9.
- 16) ロンドンと田舎の違いを単に人と事物の数量の違いと考える批評家もある。 Cf. David Simpson, *Wordsworth and the Figurings of the Real* (Hong Kong: The Macmillan Press Ltd., 1982), p.58.
- 17) John Purkis, *op. cit.*, p.79.
- 18) 実際コールリッジの自然観はワーズワスに大きく影響されている。
Cf. William Wordsworth, *The Pedlar Tintern Abbey The Two - Part Prelude*, Ed. Jonathan Wordsworth (Cambridge: Cambridge U.P., 1985), p.3.

(1990. 9. 18 受理)